

受動を能動にかえる自我の力

津守 真

人の身体は、生れつきの体質や病氣など、思うようにならない条件に左右される面が大きいことは認めないわけにはいかない。しかし、その場合でも、人が能動的にかかわれる部分が少なからずあることは、養護学校の子どもたちをみているとわかる。

六才のA子は脳腫瘍の後遺症であるが、一月号に記したように二学期は身体的に好調で、しっかり歩き、よく遊んだ。私も、自分のエネルギーをA子に向けて毎日を過す時をたのしみにした。三学期もその調子で進むことと疑わずに、新しい年を迎えた。

一月の最初の保育の日、母親の腕からおりたA子は、保育室の入口のワゴンの前で立止ったが、口に入れても良いようにと掃除しておいたおもちゃには手もふれず、部屋に入った。母親はオーバーをぬがしながら、この正月休みは最低だったんですと言う。発作がひどくなって、この数日は、夜になると、五分おきぐらいに発作を起すので、子どもも安眠できないのだという。新しい年を、力を貯えて迎えようと意気込んでいた私は、その最初

のところ、大きな黒雲に襲われたような気持になった。これまで調子よく進んできたのに、A子自身にも母親にも手に負えない外力により、生活の根底が揺さぶられたように思われ、明るいはずの新学期が暗転した。書いていて大きな表現のように思えるが、子どもとかかわって生活する保育者に、子どもの中の起った変化が、何らかの力をもたないはずはないから、私が暗い気持になったのは当然であろう。

A子はいつものように遊具棚にゆき、小さなボールをころがして、私にとつくと声を入れて催促した。二、三度ボールのやりとりをすると、私の膝によりかかって、いないないばあ遊びを求める。母親は、立ち去るときに、「こういうことがあると、いつのまにか上昇志向になっていた自分を反省します」と言った。

A子は私と数度いないないばあをくり返すと、両手を口にあて、うつろな眼になり、しばらくすると、私に身を寄せて軽いびきを発している。これがA子の発作の形である。しばらく抱いていると、目をあげて立上り、昼食のおぼんのはいつている戸棚をあけてくれと手を上げる。A子の好きなおぼんを出していると、その間にまた両手を口にあて、うつろな眼になり、私によりかかる。私は通りかかった大人に頼んで布団を敷いてもらい、膝からおろしてA子をねかせた。二、三分すると、A子は細く目をあげ、傍に坐っている私をじっと見て、また目をつぶる。A子はときどき学校で眠るが、これまでは、一度眠ると一、二時間はどんなに周囲が騒がしくとも、目を覚ましたことはなかった。この日は頻繁に目をあげ、例の発作の形、両手を口にあて、私をじっと見る。私はA子の傍を

はなれられずに数時間を過した。

A子の傍にいる間に、私のところに何人も他の子どもたちがくる。いつもだと私の手を強くひく子どもも、この日は不思議に静かで、自分の遊びを見つけてくれる。K男はひとりで石にえのぐで色をぬり、ときどき私のところにきて笑い顔をみせる。病人のいる家庭で、子どもたちが足音を忍ばせて寝床の傍を通るときのような空気が漂っている。大人の勝手ではなく、本当に病気が襲ったときに、子どもたちは人力を超えた大きな存在を、だれにもいわれないでも体の内に感じているかのようなのである。二年ほど前まで激しい発作を起していたH夫も、傍でしばらく紐をいじっていたが、他の部屋に立ち去り、身軽く移動するM夫も、布団のわきを走りぬけながら決してA子を踏むことはない。A子がときどき目をあけたとき、傍の子どもたちの声は明るい和やかさを与えてくれる。

発作は脳の中の生理的变化で人の意志を超えた外力によるできごとだから、本人にとっては予期しないときに襲われた災難のようなものである。人はこれを避けることはできない。しかし、そのように受動的に受けるよりほかない事態にあっても、その不快で困難なことに立ち向う自分に、柔軟な強さができていれば、その事態は乗りこえやすくなるのではないだろうか。また、そのことに周囲の大人たちは手をかすことができるのではないか。

話すこともせず、歩きはじめたばかりのA子は、発達の度合からいうならば、ごく初期の段階だが、それなりの自分自身をもっている。したいと思うこと、嫌なこととははっきり

している。先学期のはじめ、A子は自分のロッカーまで五メートルほども歩いて弁当をとりゆき、それを手に持って食卓まで歩いてきたことがあった。そして包みを開いてくれと私に要求した。まだ朝の十時半ころだったが、ここには子どもの素朴で真面目な生活があるように思えて、私は昼まで待たせるわけにはいかなかった。食べ終ると、A子は自分で玩具棚の前にもどって遊びはじめた。子どもが自分から願いを起こし、努力して運んできた弁当を自分で食べることができたときに、このひとめぐりの行動は、他人ではない自分がしたとの実感をもった行為となるだろう。子どもが生活している小さな舞台の上を、この子どもは自分のものとして使いこなしている。すなわち、自我の力をここに見ることが出来る。いま、発作という抗しがたい外力に受動的にさらされたとき、この自我の強さが、それに立ち向わせる力となっていると言えないだろうか。

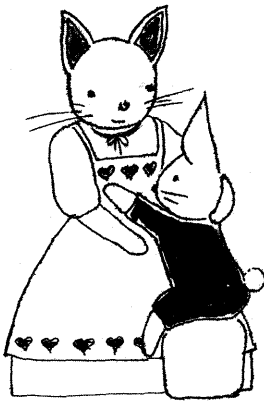
A子は発作を起こしたあと、細い目をあけて、自分がこんな災難にあっているときあなたはほんとに傍にいますかというように、慕わしげな目で大人を見る。それから、いつも好きないないないあ遊びをしてくれと、弱々しい手を差し出す。傍にきたM夫がA子の好きな小さなボールにマジックで字をかいていると、それをとろうと手を出すが、その途中で発作を起してがっくりと首を垂れ、手をのばしたままいびきを立てている。これだけのことが見られるということは、発作という生理的なできごとの中にも、子どもは自分が能動的にかかわる部分を見出そうとしていることを示しているのではないかと思う。

このことは、小さな子どもだけではなく、大人にも共通のことのように思える。身体的

にも、社会的にも、自分とは関係のないように思われる外力に襲われたとき、その受動的な事態を能動的にかかわりうるものにかえてゆくのは、人間の自我の力である。精神のより広い世界の中に、そのできごとの意味を再発見するのは、その人間のつくり上げる文化の力でもある。

A子の母親は、いままでも発作がつづく時が何度かあったが、今回顕著なことは、発作のとき、夜中でも親の顔の上に寄りかかってくることですと語ってくれた。こうすると、子どもはいくらかでも耐え易くなるのだろう。

新年のはじめ、養護学校の一隅の保育のひとつまである。



(愛育養護学校)